

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

発行 佐倉市宮ノ台4-26-8 tel & fax043-461-7004

開発行政、こんなことあっていいの？

・・・ミニ開発、乱開発を認めた、そのツケは誰が・・・

市街化調整区域内のミニ開発ができるようになったのは、条例が改正された2003年10月だった。市街化調整区域のままで、宅地造成が許可されるいわゆる「区域指定制度」によって市内の何ヶ所で宅地造成が進められ、戸建ての販売が始まった。ところがその事業計画は杜撰なもので、近隣住宅街、住民への配慮がなく、住民たちの異議申し立てが相次いだ。私が多少なりとも知っているのは、ユーカリが丘一丁目と間野台地区の住民に突如振りか掛かった環境の激変だった。20数年前のユーカリが丘開発で残された上座と隣駅臼井に近い間野台の市街化調整区域での開発で、いずれも業者は地元近隣住民との話し合いに誠意を見せず、一方的に造成を進めていた。業奢に訴えても「法令に違反しない」の一点張りで、佐倉市といえば、業者は地元とは話し合いをするようにと指導するというばかり・・・。現実には、道路や排水施設などのインフラに不備が生じ、交通渋滞・事故の危険性に見舞われ、従来の住居の隣地に突然、調整池や盛り土が出現したりしているのである。そして何よりも、緑地や森林を失っていくことに、周辺住民の失望は広がっていった。そんな事態を目の当たりにして、市は「ようやく」2008年になって、「区域指定制度」の廃止を打ち出し、市民からの意見書を募り、この3月市議会で廃止が議決された。市街化調整区域内の開発をできなくしたのだ。

佐倉市が、2003年から2008年までの市街化調整区域での「乱開発」を許可した「規制緩和」とは、いったい何だったのだろうか。今回の条例改正の趣旨である、交通量増大による交通渋滞・事故の危険性？ インフラの不備？ 自然環境の破壊？ なんて、5年前の規制緩和のとき、「なぜ乱開発を許すのか」と、とっくに市民の多くが、議会の少数会派の議員たちが声を大にして主張してきたことなのである。佐倉市はいったい誰のために規制緩和をしていたのか、の疑問が去らない。



****福祉コーナー*** ショートステイの話**

在宅介護を支える介護保険サービスの1つにショートステイがある。介護者の負担軽減や冠婚葬祭、旅行等で留守にする場合に利用されることが多い。以前は特養ホームや老人保健施設の一部を利用した併設型が殆どであった。今は単独型の施設が増え、佐倉市でも5箇所ある。単独型は個室が多く、リビングの周りに個室を配したユニットケアもある。

ショートステイには短期入所生活介護と短期入所療養介護があり、後者の方は老人保健施設や療養病床施設、医療機関が行い、医師の管理に基づいた介護や看護が受けられると言われている。特養ホーム等の介護施設が足りないので、ショートステイが施設代わりに使われる現状があるが、①連続30日を超える事 ②認定期間の概ね半数を超えることは介護保険では認められない。介護度が高く、給付限度額が多い場合は数ヶ月利用できるが連続して利用する場合は31日目は全額自己負担とするそうだ。

昨年11月にオープンした“福祉と医療で支える在宅総合支援センター”「さくら風の村」にある単独型を見学した。京成佐倉駅から約10分のところにあり、交通は比較的便利だが自然も豊かで、窓からの眺めは素晴らしい。建物は明るく清潔で、リビングは広々とし、まるでケア付ホテルのよう。リビングでは利用者と職員がなごやかに歓談していた。これでも稼働率が約90%と聞き、利用しやすいと思った。入所施設と異なり要支援の人も利用可能である。

利用料は介護サービス費（自己負担1割）と保険給付外の食費・居住費(個室)・娯楽費などからなり、介護度、利用者の所得、施設の種類により多少違いはあるが、1泊5000円前後である。送迎費も給付の対象で片道約2000円、自己負担はその1割。

問題は利用したい時に空きがあるかである。三重県・神戸市のようにショートステイの空きをインターネットで調べられるシステムを持っているところもある。介護保険が始まって以来多くの介護施設を見学したが、それぞれ特徴があり、自分にあうのを探すには体験するのが一番と思っている。ケアマネや地域包括支援センターに相談すると詳しい情報が得られる。なお、利用時に6ヶ月以内に受けた医師の診断書が必要となるが、コピーでも可能などところもあるので、オリジナルは手元に置いておくと再度利用が出来る。

介護者が病気や事故にあった時、急にショートステイを利用するより日頃から体験しておく方が本人家族ともに安心だと思う。在宅介護は介護者が息抜きできる余裕がないと長続きしない。(K)

****自治会費への寄付や募金の上乗せ、やっぱり無効！—最高裁決定くだる**

4月3日、最高裁は「赤い羽根募金、日本赤十字社への寄付を自治会費に上乗せして徴収するとした自治会の決議は、募金や寄付の事実上の強制となり、住民の思想・信条の自由を侵害するとして無効」とした大阪高裁判決(2007年8月24日)を支持、確定した。自治会側の「決議を有効」とする上告を棄却する決定が出されたのだ。本誌52号「共同募金・日赤への寄付、自治会費上乗せ無効判決に寄せて」で、高裁判決を紹介した(2007年10月)が、自治会費からの寄付や募金に疑問を抱いたり、迷ったりしている自治会や自治会員は全国的にも多いにちがいない。今回の最高裁決定は、年度替のタイミングでもあり、強力なメッセージになったと思う。(M)

あなたの思い出の喫茶店は一昭和は遠くなりにはけり（2）

「憲政記念館」それとも「赤プリ」？

大学卒業後、池袋の家から目白の職場に通った二年間も楽しかったが、一生の仕事と思うと少し違うナ、の思いから結局は、永田町の役所勤めの道を選んでいた。界隈の喫茶店といえば、国立国会図書館、社会党文化会館、憲政記念館、都道府県会館などのレストランであった。その名も硬い施設だったから、珈琲の味もいま一つだった。さらに昼休みのジョギングコースの内堀通りには、国立劇場「あぜくら」、東条会館、半蔵門会館などがあった。赤坂プリンス、フェアモントなどのホテルでのお茶は、快適ではあるが、当時の若者には贅沢すぎた。少し遠出した赤坂あたりの店に、同じ職場の意外なカップルを発見して噂になるとも多かったっけ。

1970年代、神楽坂の「軽い心」、神田の「小鍛冶」

サークルの月例会は神楽坂赤城神社脇の東京都教育会館で開かれることが多かった。神楽坂下に大きなネオンサインを掲げた「軽い心」という名前の店で、二次会になることもあった。また、ケーキに目がなかった友人に声を掛けられ、ときどき集まったのが、神田北口の「小鍛冶」であった。その後も、山手線を通るときは、車窓からあの独特の文字の看板を確かめていたのだが、その「小鍛冶」も、ごく最近閉店したらしいのだ。

そして、いま、近くの店も

さらに10年後の結婚、転居、転職があって12年間、1988年千葉県に住み始めたものの、喫茶店とは縁のない日常となっていた。それでも、同じ町内にあった喫茶店「ホームズ」は、私たちよりも古いから、二十年以上営業していたことになる。自治会や地域の仲間でも何度か利用していたが、昨年閉店してしまった。オーナーが転出したのも自治会の回覧板で知った。ケーキは奥様が焼き、1日わずかしか置いてなかった食パンやバターロールなども、パン屋さんのそれとは一味違っていたのにとさびしいことだった。

あの街で、ふたたび

近頃では、鑑賞の後の美術館のカフェ、日帰りの旅先で見つけた喫茶店でのひとときが、私には至福の時間だ。それに、この10年間、ときどき出かけた海外での、歩き疲れた後の珈琲は格別であった。乗り継ぎの空港のカフェはせわしいけれど、あの雰囲気も悪くはない。ウィーンのSILK、プラハのカフェ・ミレーナやアヴィニヨンの美術館前の小さなカフェ、ブルージュの旧市街広場のにぎやかなカフェ、もう一度出かけてみたい・・・。

「滝沢」閉店で始まった、喫茶店の思い出めぐりでは、多くの店がすでに前世紀に閉店の憂き目を見ていることを、思いがけず知るハメになった。ささやかな青春の軌跡が消し去られるような寂しさである。景気の下降、生活様式の変容、文化の多様化、コミュニケーションの閉塞などが重なり、いわば零細の個性的な喫茶店は消え、チェーンやフランチャイズ方式の店のみが生き残れる時代になってしまったのだろうか。(M)

菅沼正子の映画招待席 26

つくない

—小さな嘘に踏みにじられた人生—

背筋が凍りついたまま、しばし言葉もでない。多感な思春期にある少女の、ピュアな心から生まれた小さな嘘。それはあまりにも罪が大きすぎた。「覆水盆に返らず」である。だから、冤罪事件というのはゾッとする。けしてあってはならないのだ。

原作はイギリスのブッカー賞作家イアン・マキューアンのベストセラー小説「贖罪」。「嵐が丘」を思わせるスケールの大きな女性文学を、まるで実在人物のドラマ化のような手法で描いて魅力的。たとえば、1つの事実を当事者と傍観者、双方の視点から見つめることで、何が真実なのかを追求していく。このようにしてその判断は、見る人の心にゆだねるといふ二重構造の語り口が随所に見られる。

1935年のイングランド。大富豪の政府高官タリス家。真っ暗な画面にタイプライターのキーを叩く音。それがピアノのようなリズムを持って、やがてオーケストラのメロディと重なり、13歳の少女ブライオニー（シアージャ・ローナン）の姿が浮かびあがってくる。作家志望のブライオニーは、我が家で催す園遊会用の舞台劇を書いているのだ。脱稿するともういっばしの作家気取り。凜とした足どりでママに見せに行く。

一方、姉のセシリア（キーラ・ナイトレイ）は、ケンブリッジを卒業して家に戻ったばかりだが、ロビー（ジェームズ・マカヴォイ）が気になってしかたない。恋しているのだ。でもそれは身分違いの恋。兄妹のようにして育てられてきたけれど、彼は使用人である家政婦の息子。そんな障害を気にしながらも、ようやく心が通い合うと、恋の炎は一気に燃えあがる。

セシリアとロビーの愛し合うその姿をのぞき見してしまったブライオニーは、愕然とする。それはまさに禁断の世界。妄想なのか、空想なのか…いや、確かに現実ではないか！そんな矢先に、屋敷で開かれた園遊会でレイプ事件が発生する。ブライオニーが自信をもって犯人をロビーだと証言したことで、2人の人生の歯車は狂いはじめる。どんな運命が待ち受けているのか、ここから先はサスペンスでたたみかける心理劇の味わい。

ブライオニー役は年齢に合わせて3人の女優が演じる。作家として成功した老年のブライオニー役はヴァネッサ・レッドグレイブ。このパートは短いがとても衝撃的。さすがイギリスを代表する大女優の名演。どれほどの償いの気持があったのか、ここでも見た人の判断にゆだねられているが、私は、魂を真髓から粉々にぶち砕かれた感じだ。

